

体外離脱に対する医学的アプローチ

ワイルダー・グレイヴス・ペンフィールド (Wilder Graves Penfield)

1955年 脳の右側頭葉のシルベウス裂を電気刺激すると、体外離脱を体験したり過去の体験が見えることを発見

オラフ・ブランケ(Olaf Blanke)

2005年 大脳皮質の角回を電極で刺激したところ「ベッドに横たわった自分を上から見下ろしている」ように感じることを報告
視覚と触覚・平衡感覚がミスマッチを起こした結果？

これらの研究は「体外離脱という経験を脳が処理する過程を示したもの」であり、体外離脱が全て脳の誤作動・幻覚であると主張するものではありません。
例えば、脳の一部を刺激したときに「リンゴの味がした」ように感じた場合、「リンゴを味わう行為を脳が処理する場合にその部位が働くこと」が分かったのであって、被験者が過去に食べたリンゴが全て脳の作り出した幻覚とは言えないのと同じことです。

リンゴを本当に食べたのか、それとも幻覚だったのか、その記憶だけから議論しても答えは出ません。

リンゴの芯が残っていたり、食べているところを目撃した第三者の話から判断されるべきです。同じように、体外離脱が脳内で作り出された幻覚なのか、実際に何かが体外に出た経験なのかは、第三者が確認可能な現象が、体脱中の経験と一致しているかどうかで判断されるべきだと考えられます。

(管理人)